五日後、ドラム缶一本のガソリンを積んでトラックは帰って来た。

どう歩いたのか分からぬが、寮に帰ると同僚の三浦君の死を知らされた。彼は五日の夜より広島市内の親戚に行っていて被爆のため焼死、全く誰だか判らないほど、焼けていて、神戸に在住の歯科医師である父親が歯形で確認された。

爆心地付近ではまだ立木がくすぶっていた。ドームの屋根は鉄骨が今にも崩れ落ちんばかりに、くにゃくにゃに曲がっていた。現在の様な円形ではない。目の粗い竹かごを、半分足で踏みつぶした様だった。

七十年は生物が生息出来ないと言う噂が流れたが、蝉の声が煙を吐いている立木の間から聞こえたように耳に残っている。死体を焼く臭気か、異様に悪臭が鼻をつく。

太田川には、死体を載せた浮き舟が何隻もあり、岸辺に集められ、砂の上には市場のマグロのように死体が並べられ、所々で荼毘（だび）の煙が上っている。先程の臭気はこのためだったのだ。

被爆直後より十日間近く救援作業に従事したが、何人を救護できただろう。横穴壕に収容した生存者の耳や顔の傷口には蛆虫（うじむし）がうごめいていた。この間何を食べ、何所で眠ったのか定かな記憶は残っていない。

恐らく我々が救護した人たちは全てこの世を去っているだろう。当時、自力で動けなかった人たちばかりだからだ。

「水」それは「末期の水」になってしまった。当時死者は七万人と言われたが、現在では十四万人とも言われている。

一人として助けられなかったことを心からわび、放射能の後遺症に苦しむ多くの方々の回復と、死者の冥福を祈る。そして二度と、核兵器による惨事の起らないことを心より願う。

（後記）

昭和六十年広島平和公園を訪ね、記念碑に死没者の冥福を祈ってきた。原爆資料館には当時の姿を見て感無量であったが、当時の実情は、今見る資料の数十倍、数百倍の悲惨なものであったことを、見学される人々にも、後世の人々にも伝えたい。

毎年八月六日午前八時十五分に広島の方に向い手を合わせて黙祷を忘れたことはない。